

# 從符際翻譯的觀點 看村上春樹《挪威的森林》作為日語教材的可能性

賴錦雀

東吳大學日本語文學系教授

## 摘要

在當代日語教育中，除了文字的教材之外，還有使用語音和圖象的教學法。利用融合音頻、視頻的視聽說教學也是重要的教育領域之一。文字教材可以有效地訓練思考能力，而加上音頻和視頻的教材則有益於內容的理解。一般而言，台灣的日語教育界有將文學作品視為文學專門教育素材的偏見，導致除了文學課程之外，文學作品鮮少被當成日語教學教材。然而，由跨文化理解的觀點而言，大學生除了以單字、文法為主的日語教材之外，文學作品的鑑賞也是重要的學習活動之一。尤其是電影化的小說，可以從雅各布森（1959）所提的符際翻譯的角度來加以考察，比單獨依賴文字素材的學習活動更有成效。本論文旨在考察村上春樹小說《挪威的森林》及其翻拍電影，並思考其作為日語教材的可能性。

關鍵詞：日語教材、跨文化理解、村上春樹、《挪威的森林》、  
符際翻譯

受理日期：2017.08.31

通過日期：2017.10.20

**Possibility of Haruki Murakami “Norwegian Wood”  
as a Japanese teaching material: From the point of  
intersemiotic translation**

Lai, Jiin-Chiueh

Professor, Soochow University, Taiwan

**Abstract**

In modern Japanese language education, viewing by the video and graphics is an important educational area in the same way as listening comprehension, reading comprehension, speech and writing. Character of the teaching materials will help in the training of the thinking power development. And video teaching materials plus the video and audio is easy to understand the content. In the Japanese language education in Taiwan, literary work is considered that it is teaching material of literature professional class, not used much as a teaching tool of language. But, in the point of view of cross-cultural capacity building, not only Japanese learning of grammar · sentence patterns by ordinary teaching materials, Japanese literary works appreciation with a cultural understanding is also important. The case of the film adaptation of the novel, can be discussed from the point of view of intersemiotic translation, more effective rises than character teaching materials. In this paper, I want to consider the novel and movie of "Norwegian Wood", and to think of the possibility of Haruki Murakami literature works as Japanese teaching materials.

Keywords: Japanese teaching material, Cross-cultural understanding,  
Haruki Murakami, Norwegian Wood, intersemiotic translation.

日本語教育教材としての  
村上春樹『ノルウェイの森』の可能性  
—記号間翻訳の観点から—

頼錦雀

東呉大学日本語文学科教授

要旨

現代の日本語教育では文字教材だけでなく、音声、映像を利用する教授法も考えられる。映像や図形によるビューイングは聴解、読解、発話、書写と同じように重要な教育領域である。文字だけの教材は思考力育成の訓練に役立つが、映像や音声を加えた動画教材は内容が理解しやすいと思われる。一般的に言えば、台湾の日本語教育では文学作品は文学専門の授業の教材だと決め付けられることもあるので、文学の授業でない教材としての文学作品利用はあまり聞かれない。しかし、大学生なので普通の教材による文法・文型中心に限る日本語学習だけではなく、異文化交流能力育成の視点から、日本語学習とともに文化理解を伴う日本語文学作品鑑賞も重要だと思われる。特に映画化された小説の場合、言語学者 R・ヤコブソン（1959）の記号間翻訳の観点から考察することもでき、文字だけに頼る教材よりもっと効果が上がるとと思われる。本稿では『ノルウェイの森』の小説とその映画化されたものを考察し、日本語教育教材としての村上春樹の可能性を考えたいものである。

キーワード：日本語教育教材、異文化理解、村上春樹、  
『ノルウェイの森』、記号間翻訳

# 日本語教育教材としての 村上春樹『ノルウェイの森』の可能性 —記号間翻訳の観点から—

頼錦雀

東呉大学日本語文学科教授

## 1. はじめに

1985年に村上春樹の作品ははじめて台湾に紹介された。頼明珠による中国語訳だったが、それは村上の作品の最初の外国語訳でもあった。1989年に『ノルウェイの森』の中国語訳『挪威的森林』が出版され、出版社の尽力によって台湾における「村上春樹現象」が発生し、「挪威森林」という言語景観が出た。また、有名な台湾歌手の伍佰が『ノルウェイの森』の中国語訳を読んで感銘を受けて1996年に作った中国語の歌「挪威的森林」もヒットした。そして、2002年に『ランゲルハンス島の午後』の中国語訳『蘭格漢斯島的午後』が出版され、その造語の「小確幸」が台湾で広く上げられ、今日までに至っている。『1Q84』、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』、『職業としての小説家』などの中国語訳が出版された時も話題になり、多くの人に読まれている。

日本語教育の目標は学習者の異文化交流活動のための日本語力の育成にあるが、いわゆる日本語力というのは日本語の言語構造的な能力だけではなく、社会文化能力及び語用能力も重要である<sup>1</sup>。世界で有名な作家であり、翻訳者でもある村上春樹の作品を読んだり翻訳したりすることによって、日本語学習者は日本語力を身に付けるだけではなく、面白い作品を味わうことによって、フィクション、ノンフィクションの世界に入っているいろいろな考えるようになり、自分の人生をもっと充実させることができるのではないかと思われる。

現代の日本語教育では文字教材だけでなく、音声、映像を利用す

---

<sup>1</sup> 『JF日本語教育スタンダード(2010)』第三版を参照。

る教授法も考えられる。ビューイング (viewing) は聴解、読解、発話、書写と同じように重要な教育領域である。台湾の日本語教育現場において指定教材を使わなければならないのは普通であるが、特に初級、中級の多くは構造シラバスに基づく教科書であるので、人文的要素が欠けている嫌いがある。そして、上級の場合、文学作品講読は文学専門の授業のことだと決め付けられることも見られるので、文学の授業でないと教材としての文学作品利用はあまり聞かれない。異文化交流能力育成の視点から見れば、日本語学習と共に文化理解を伴う日本語文学作品鑑賞もできると思われる。特に映画化された小説の場合、言語学者 R・ヤコブソン (1959) の記号間翻訳の観点から考察することもでき、文字だけに頼る教材よりもっと効果が上がると思われる。

本稿では『ノルウェイの森』をテキストに、記号間翻訳の観点から小説と映画における表現について考察し、日本語教育教材としての村上春樹の可能性を考えたいものである<sup>2</sup>。

本論に入る前にまず、日本語教育における記号間翻訳とビューイングの働きについて述べた後、『ノルウェイの森』のあらすじ、登場人物、社会的背景、映画と小説の相違を見て、最後に日本語教育教材としての『ノルウェイの森』の可能性について考える。

## 2. ビューイングと記号間翻訳

日本語教育においてビューイングも記号間翻訳も重要な要素である。

### 2.1 ビューイング

21世紀における日本語教育は教材の側面から見れば、文字教材だけではなく、実物、音声、映像などによる教材もいろいろある。文字とは違って、音声と映像による映画のような教材は日本文化理解

---

<sup>2</sup> 『ノルウェイの森』は林 (2015)、范 (2015)、米村 (2016)、カタリン (2017) を見て分かるように、村上春樹国際シンポジウムではよく取り上げられる人気作品である。そして、カタリン (2017) の調査結果によれば、ハンガリーでは『ノルウェイの森』は最も人気の高い村上作品である。

の深化ができ、学生の学習意欲を高めることにも繋がると思われる。特に映画化した小説の場合、文字による鑑賞だけではなく音声と映像を共に鑑賞した後、小説の内容と比較し、いろいろ思索することも考えられるので、思考力、行動力の鍛えも期待される。カナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドにおける英語教育では、テレビ、写真、漫画などの視覚的表現の理解がビューイング (viewing) という教育領域に設定されるようになった<sup>3</sup>。台湾の英語教育でも聴解、発話、読解、書写の技能に「viewing」「visually representing」という技能を導入した小学校がある<sup>4</sup>。筆者も日本語会話教育において実物やビデオ、映画によってビューイングの重要性と効果を体験済みである。

## 2.2 記号間翻訳

一方、ロマン・ヤコブソン (1959) が述べているように、翻訳には同じ言語の内部における言語内翻訳、違った言語の間の言語間翻訳と違った記号かジャンルの間における記号間翻訳というのがある。

- (1) 言語内翻訳：同じ言語の内部の翻訳のことを指す。例えば中国語における標準語と客家語間の翻訳。
- (2) 言語間翻訳：多くの外国語教育で取り扱われている翻訳のことを指す。例えば中国語と日本語の間の翻訳、通訳。
- (3) 記号間翻訳：言語記号で非言語記号を訳すか、非言語記号で言語記号を訳すことを指す。例えば図画か映画か音楽で文字を代表することを指す。

小説『ノルウェイの森』とその映画化したものの関係はつまり記号間翻訳に属しているものであるが、外国語教育の観点から見た場合、次のようなことが考えられる。文字による小説から作られた映

---

<sup>3</sup>門倉 (2011) を参照。

<sup>4</sup>苗栗・僑樂国民小学校では英語イマージョン教育を重視しているが、インタラクティブを重視する教育方法で聴解、発話、読解、書写の外に、視覚観察 (viewing) と図形描写 (visually representing) の複式技能を養成するのである。

画は鑑賞者に原著の文字にない、立体感と生命感が溢れる音声及び映像を与え、生き生きとした世界を見せることによって共感を引き起こすので、日本語学習者に文字では得られない日本語の体験、原作の日本社会背景、雰囲気を感じさせる機会を提供する。そのようなことによって学習者は文字のメリハリやリズム感、臨場感をもつ音声に触れ、記号の表現と記号の内容の統合によって、その内容の日本社会背景を理解することに繋がるので、日本語学だけではなく、日本社会理解もできる。言い換えれば、小説では書き言葉の文字による日本理解しかできないが、映画という違った記号によって、日本語の音声、日本の映像、日本の社会背景に接することができるので、精神的満足だけではなく、知識的満足にも繋がるわけである。

但し、言語間翻訳において起点言語を大事にする「異化」と目標言語を大事にする「同化」があるように、小説の映画化にも脚本家か監督の考え方よりも小説の原作内容をそのまま忠実に表現する視点と、作家の原作内容よりも脚本家か監督の考え方を大事にする視点が考えられる。どちらがいいのか、というよりも映画の作成方針に関わることであるが、筆者としては、小説の作者のオリジナルな創造性を大事にすべきだと思う。

本稿では『ノルウェイの森』のあらすじ、登場人物、社会背景を考察し、小説と映画の相違を明らかにした後、日本語教育への示唆について述べたいものである。

### 3. 『ノルウェイの森』のあらすじと登場人物

#### 3.1 小説のあらすじ

男主人公ワタナベが The Beatles の歌「ノルウェイの森」を聞いたドイツの空港で幕が開いて、そして緑に電話をかけた上野駅で幕が下りた村上春樹の小説『ノルウェイの森』は、その原型の短編小説「螢」から発展された、孤独の愛を描いた恋愛小説である。男主人公のワタナベが自殺した高校の親友キズキの恋人だった直子と、大学で同じ授業をとって仲良くなった緑の 2 人の女性との関わ

りの中で、生と死について考えた物語である。高校時代、唯一の友人のキズキという同級生からその恋人の直子を紹介された。三人の関係は不思議なものである。ワタナベと直子は共通の話題はなく、2人ではほとんど会話ができなかったが、キズキが間に入ると、3人での会話がうまく成り立っている。そんなある日、キズキは遺書もなく、自宅で自殺した。

高校卒業後、ワタナベは故郷の神戸を離れて東京の大学に入学したが、その東京で偶然、直子と再会した。直子も東京の大学に入っていたのである。二人は一緒に歩くというデートを重ねているうちに、直子の20歳の誕生日を迎えた。直子のアパートで誕生パーティーをした夜、ワタナベは直子と寝た。その翌日から、ワタナベは直子と連絡が付かなくなった。直子は行方不明になったのだ。ワタナベはそれで精神的に打撃を受けた矢先に、直子が京都にある精神患者のための診療所に入った情報を取った。大学の授業に出ているうち、ワタナベは同じ授業に出ている緑とよく会うようになった。小さな書店を営んでいる緑のうちにも遊びに行ったが、ワタナベは直子のことが忘れられないので、すぐには緑と付き合う気にはならなかったようだ。緑と会っていても、ワタナベは診療所に直子に会いに行った。あそこで直子のルームメートの玲子に会った。

キズキが死んだあと、直子も死の世界に行こうとしていたが、ワタナベと東京で再会したことによって生の世界にとどまっていた。しかし、20歳の誕生日の夜にワタナベと寝た時から、キズキの死について改めて限界を感じたようで、診療所に入ったあとも立ち直らないで、つい自殺の道を選んだ。高校時代のキズキの自殺に大学時代の直子の自殺によって、ワタナベはますます生の中に死があることを実感してならなかった。玲子と二人でノルウェイの森を含めた50曲のギターによって、直子の淋しくないお葬式を行ったワタナベは玲子を駅に送った後、公衆電話で緑に電話したが、自分がどこにいるのか分からない、というところで物語が終わった。

『ノルウェイの森』の内容を時間配列から考えると次のように整



理される。



(図 1) 小説『ノルウェイの森』の時間的配列

上の時間的配列を登場人物と一緒に考えると、次のようにまとめられる。

(表 1) 小説『ノルウェイの森』における登場人物と時間的配列

関係人物	1967年	1968年				1970年	……	1987年
キズキ	5月キズキが自殺							
突撃隊		ワが学生寮で突撃隊とベが突撃隊を襲撃する	7月の末、突撃隊がワが寮に突撃し、突撃隊が失踪する					
永沢		ワが学生寮で親と永沢が会って話をする	永沢が就職したことを報告する					
直子	1968年5月東京でワと直子が再会	4月直子の誕生日にワが来ると言われる	5月直子が大学で授業を受ける	10月直子が草子と直井を再会する	8月25日直子が自殺			
緑			9月直子と緑が出会った	ワが病気で入院し、直子が看病をする			ワが野上電氣の電線工に就職する	
レイコ				初秋、レイコが原美奈の会に入会する	阿美奈がその会に入会する			
ハツミ				永沢が就職したことを報告する	永沢が就職したことを報告する			

『ノルウェイの森』における登場人物と時間的要素を入れて考え

ると、そのあらすじは次のようになる。

(表 2) 小説『ノルウェイの森』のあらすじ

時間	ワタナベの年齢	『ノルウェイの森』のあらすじ
1987	37 歳	11月の雨の日、ハンプルク空港に着陸しようとするボーイング 747 のシートに座っていた。どこかのオーケストラが演奏するビートルズの「ノルウェイの森」の BGM が流れ始めた。それを聴いてワタナベが混乱した。
1969	19 歳	10月、ある草原で歩きながら直子はワタナベに井戸の話をしてくれた。
1968	18 歳	春、ワタナベが大学に入ったばかりのときの話。
1967	17 歳	高校三年生の 5月、ワタナベの仲のいい友人キズキが自殺した。
1968	18 歳	4月、ワタナベは何もかも忘れるために故郷の神戸を離れて東京の大学に入った。5月の梅雨の季節にばったり直子と東京で再会した。
1969	19 歳	正月の間、ワタナベは直子の部屋で食事していた。
		1月の末、同居人の突撃隊が熱を出した。ワタナベは直子と演奏会に行けなかった。
		2月の終わりに、ワタナベは寮の上級生を殴ったが、東大生の永沢さんに助けってもらった。その永沢に連れられて何回か女遊びに行った。
		4月半ば、直子の 20 歳の誕生日の雨の夜、二人が寝た。キズキのことを聞かれて泣き崩れた直子はその直後、行方不明になった。
		5月の末に、学生運動が進んで大学がストに入った。授業ができなくなったので、ワタナベはアルバイトを始めた。
		7月の初め、直子から手紙が来た。京都の療養所にいると知らせてくれた。
		7月の末に、ワタナベは突撃隊から虫をもらった。
		夏休みの間、機動隊によってバリケートが叩き潰され、ストが解除した。
		9月に大学の講義が再開した。但し、突撃隊が大学に戻ってこなかった。ワタナベは緑という同級生と付き合うようになった。
		日曜日の朝、ワタナベは緑の家へ遊びに行った。火事見物してから緑と初めてキスした。
		初秋、ワタナベは京都の阿美寮へ直子に会いに行った。初めてレイコに会った。レイコが弾いた「ノルウェイの森」を聴いた。そして、直子が「ノルウェイの森」を聴くときどきすごく哀しくなることを聴かされた。レイコから、13 歳の美少女に同性愛のことを求められたせいで崩れて自殺未遂の結果、療養所に入った経緯を聴いた。
		ワタナベは日曜日に緑の父の病氣見舞いに病院へ行った。キュウリを食べさせたあと、<切符><緑><頼む><上野駅>と言われたが、意味不明だった。その五日後の、冷たい雨の金曜日の朝、その父親が死んでしまった。
		ワタナベはレコード店で手のひらを深く切ってしまった。
		ワタナベは永沢の外務省就職祝いのためにハツミと三人で食事をした。永沢と口論したハツミはワタナベとビリヤード屋に入った。そのあと、一緒にハツミの家に行って包帯を直してもらった。 (そのハツミは永沢がドイツに行ってしまった二年後に他の男と結婚したが、その二年後に剃刀で手首を切った。)
日曜日の朝、直子に手紙を書きながら雨の中の庭を眺めていた。		
ワタナベは緑と映画を見てから緑の家に行った。		
1970	20 歳	11月にワタナベは 20 歳になった。直子とレイコからセーターのプレゼントをもらった。
		12月の休みに京都の療養所に直子に会いに行った。二人で暮らさないかと誘った。
		1月の試験が終わり、吉祥寺の郊外に縁側のある一軒家の部屋を見つけて引っ越した。春休みの間、緑との連絡は途絶えた。
		4月 10 日、久しぶりに緑にあったが、また連絡が絶えた。孤独の中で 4 月を送った。
		5月の半ばに直子が新しい病院に移る知らせが来た。
		6月の半ばに緑が話しかけてきた。デパートの雨の屋上で二人がキスして和解した。
		8月 25 日の夜、直子が阿美寮で首つりして自殺した。8月の末、直子の淋しい葬式が終わってしまうと、ワタナベは一ヵ月旅行に出た。
		10月 2 日にワタナベは旅行先から東京に帰ってきた。
		ワタナベが東京に戻った一週間後、レイコが訪ねてきた。レイコと 51 曲のギターの曲で直子の淋しくないお葬式をやってから、二人が寝た。
		10月上旬、レイコを上野駅に送ったワタナベは電話ボックスから緑に電話した。「今どこにいるの?」と聞かれても、自分はどこにいるのか、分からなかった。そのどこでもない場所のまん中から緑を呼びつけた。

## 3.2 登場人物

### 3.2.1 人物の紹介

(1) **ワタナベ** 男主人公。高校時代、親友のキズキが自宅で自殺した。それでワタナベは高校卒業後、故里の神戸を離れて東京の大学に入学し、学生寮に住んでいた。読書愛好家である。ある日、自殺した親友の恋人だった直子に偶然に東京で会って、一緒に歩くななどのことをしているうちに彼女を愛するようになった。しかし、キズキのことを忘れられない直子には愛されはしなかった。

(2) **直子** ワタナベの親友のキズキの恋人。東京で偶然に会ったワタナベとデートらしいことをし、20歳の誕生日の夜にワタナベと関係した。ワタナベに自分のことを忘れないでほしいと言いながら、本当はワタナベを愛していなかった。ワタナベと寝た後、精神病の診療所に入ったが、結局自殺した。

(3) **キズキ** ワタナベの高校時代の親友で、直子の恋人だったが、ワタナベとビリヤードをして勝ったその夜、遺書もなく自宅で自殺した。

(4) **突撃隊** ワタナベの学生寮のルームメートで、地図書きの好きな人であったが、規律正しい生活と服装のことでよく嘲笑の相手にされた。夏に蛍をワタナベに送った後、行方不明になった。

(5) **緑** ワタナベと同じく「演劇史Ⅱ」の授業を取った大学生で、うちは書店を営んでいる。母親が死んだとき、父親に「俺はお母さんを亡くすよりはお前二人を死なせた方がずっとよかった」(『ノ』<sup>5</sup>上、p.133)と言われた。ワタナベの前ではいつも言いたいことを率直に言っている。彼氏がいるのにワタナベに近づいてきた。後に彼氏と別れて、ワタナベと付き合うようになった。

(6) **玲子** 直子の診療所のルームメートで、直子の世話を親切にやった。ピアノのコンクールに失敗して精神的に崩れたが、直った後、結婚した。ピアノの稽古の教え子の少女に同性愛の行動を求め

---

<sup>5</sup> 『ノ』は『ノルウェイの森』の略称である。以下同。

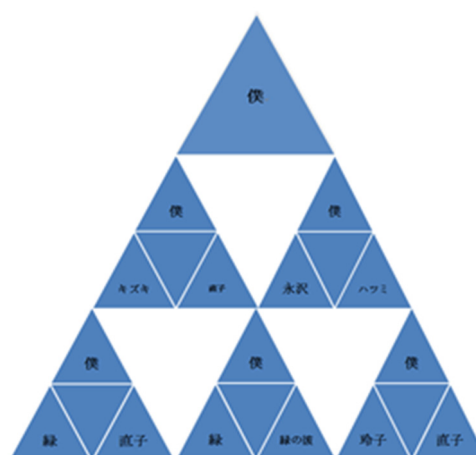
られて断れなかったのもう一度精神的に崩れて診療所に入った。直子が死んだ後、東京のワタナベのところに行ってギターを 50 曲弾いて、ワタナベと二人で淋しくない直子のお葬式を行った。

(7) 永沢 ワタナベの学生寮の先輩で、東京大学法学部の学生だった。父兄とも医者だが、法律学を専攻し、外交官になり、外国へ行くことに決めた。父親の行為に賛同しないが、その父親のお金で贅沢三昧に暮らしている。彼女がいるのに結婚するつもりもなく、他の女の子と寝る。

(8) ハツミ 永沢の彼女、東京の女子大学の学生である。服装のセンスがよく、綺麗で理性的で、卓球が上手である。永沢がドイツに赴任した後他の男と結婚したが、2年後、手首を切って自殺した。

### 3.2.2 登場人物の三角関係

『ノルウェイの森』における登場人物は次のように複数の三角関係が捉えられる。(1) 高校時代のワタナベとキズキと直子、(2) 大学時代のワタナベと直子と緑、(3) ワタナベと永沢とはつみ、(4) ワタナベと直子と玲子、(5) ワタナベと緑と緑の彼氏。ワタナベを天辺に置くと(図2)のようにまとめられる<sup>6</sup>。



(図2) 登場人物の三角関係

### 3.2.3 生界と死界

ワタナベはキズキの死後、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」(『ノ』上、p.48) と思った。登場人物を生、死によって分類すると、次のように分けられる。生と死の視点から見れば、ワタナベと永沢は生界に属しているが、自殺した直子、キズキ、ハツミは死界に属してい

<sup>6</sup>『ノルウェイの森』の原型「螢」における僕と友人、彼女の三角関係については山根(2007)を参照されたい。

る。そして、自殺未遂の玲子、行方不明の突撃隊は生界と死界の狭間に属している。語族の視点から見た場合、ドイツ語を勉強したワタナベ、緑とドイツに赴任した永沢は生界に属しているのに対して、フランス語を勉強した直子と服装のセンスがよかったハツミは死界に属している。また、音楽を専攻したが自殺未遂の玲子と地理学専攻で行方不明の突撃隊は生界と死界の狭間に属している。更に、この人たちは自分と接触しているワタナベを通して自分の心を伝えているように考えられる。

#### 4. 『ノルウェイの森』における創作理念と内容

村上自身は『村上春樹全作品 1979～1989⑥ノルウェイの森』の別添冊子「自作を語る」で「100パーセント・リアリズムへの挑戦」という題で次のように述べている<sup>7</sup>。

『ノルウェイの森』を書くときに僕がやろうとしたことは三つある。まず第一に徹底したリアリズムの文体で書くこと、第二にセックスと死について徹底的に言及すること、第三に『風の歌を聴け』という小説の含んだ処女作的気恥ずかしさみたいなものを消去してしまう「反気恥ずかしさ」を正面に押し出すこと、である。(中略)帯のコピーに「100パーセントの恋愛小説」という言葉を入れてもらったのは、こういう小説を出すことに対する言うなれば僕のエクスキューズであった。僕が言いたかったのは簡単に言えば「これはラディカルでもシックでもインテレクチュアルでもポストモダンでも実験小説でもないただの普通のリアリズムの小説であります。だからそのつもりで読んでくださいね」ということである。

(『村上春樹全作品 1979～1989⑥ノルウェイの森』の別添冊子「自作を語る」)

上述した村上春樹の創作理念によって『ノルウェイの森』では次のような内容が描かれている。

---

<sup>7</sup>澤田 (2014) による。

#### 4.1 スト

1960年代後半における日本の大学のストについて『ノルウェイの森』の原型の「螢」では触れられなかったが、『ノルウェイの森』では「5月の末に大学がストに入った。彼らは「大学解体」と叫んでいた。解体するならしてくれよ、と僕は思った。解体してバラバラにして、足で踏みつけて粉々にしてくれ。全然かまわない。そうすれば僕だってさっぱりするし、あとのことは自分でなんとでもする。手助けが必要なら手伝っていい。さっさとやってくれ。大学が封鎖されて講義はできなくなっ」(『ノ』上、p.79)と、と述べられている。ストが終わると大学は無傷だったので主人公のワタナベは愕然した。講義が再開するといちばん最初に参加してきたのはストを指揮した立場にある連中だった。おかしいと思ったので、どうしてストをつづけないで講義に出てくるのか、とワタナベはストを指揮した立場にある学生に訊いてみたが、彼らは答えられなかった。それについて「彼らは出席不足で単位を落とすのが怖いのだ。そんな連中が大学解体を叫んでいたのかとおかしくて仕方なかった。そんな下劣な連中が風向きひとつで大声を出したり小さくなったりするのだ。(中略)こういう奴らがきちんと大学の単位をとって社会に出て、せっせと下劣な社会を作るんだ」(『ノ』上、p.90)、と主人公のワタナベは批判した。

台湾も近年、何回か学生運動があったが、その多くは学校ではなく、政府が対象になっていた。『ノルウェイの森』におけるストに触れることによって当時日本の社会問題、大学問題のことが分かり、台湾のことを振り返ることが考えられる。若者は何も考えないより何かを真剣に考えてそれに取り組む態度や精神の養成が大切だと思われる。

#### 4.2 性と愛

1960年代は性革命の時代でもあり<sup>8</sup>、性行為の自由、同性愛、不婚同居などの事例が多かった。『ノルウェイの森』においては異性間

---

<sup>8</sup> 1960年代の性革命については何(1997)を参照されたい。

の性行為に関する描写も同性愛に関する叙述も見られる。平安時代の『源氏物語』で描かれたように古代の日本貴族は積極的に色を求めていた<sup>9</sup>。中国では告子が「食色性也」と言っていたように、食べることと性行為をすることは人間の本性なので善とか悪に関係ないことだと考えられていた。但し、愛情と道德観のことをあわせて考えてみると、恋人がいるのに他の人と体の関係を持つのはやはり咎められることである。ワタナベがハツミのために永沢と連絡を断った(『ノ』下、p. 120)のも高校時代のガール・フレンドに申し訳ないように思った(『ノ』下、p. 229)のもそのためだろう。考えてみれば、『ノルウェイの森』では異性愛だけではなく同性愛のことについても描かれたので注目を集めたのではないだろうか。但し、その内容は「僕」と「彼女」のことしか述べられていない原型の「螢」とは大分違っている<sup>10</sup>。

#### 4.3 生と死

『ノルウェイの森』においてキズキ、直子、直子の姉、直子の父親の弟、ハツミの自殺及び緑の母親、父親の病死など、多くの死が描かれている。直子は恋人のキズキの自殺の前に姉の自殺のこともあったので精神的に駄目になった。それで療養所に入ってしまった。また、二人の子供とも自殺した直子の両親はやはりやり切れなかっただろう。それで直子が死んだことをワタナベに知られたのを気にしていた。

一方、キズキが死んだあと、唯一の友人を亡くしたワタナベは故里を離れたかった。「誰も知っている人間がいないところで新しい生活を始めたかったのだ。」(『ノ』上、p. 47。下線は引用者)そして、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」(『ノ』上、p. 48)、「死は生の対極にあるのではなく、我々の生のうちに潜んでいるのだ」(『ノ』下、p. 226)と悟った。

---

<sup>9</sup> 頼 (2015) を参照されたい。

<sup>10</sup> 「螢」では「僕」と「彼女」のことしか述べられていないので『ノルウェイの森』とその原型の「螢」とは大分内容が違っている。

但し、直子に死なれてやはり悲しくてたまらなかった。三日間東京で映画を見てから一ヶ月間旅に出ていた。その間、「愛するものを亡くした哀しみを癒すことはできないのだ」「我々はその哀しみを哀しみ抜いて、そこから何かを学びとることしかできないし、そしてその学び取った何かも、次のやってくる予期せぬ哀しみに対しては何の役にも立たないのだ」(『ノ』下、p.227)と考えていた。

ワタナベと直子とは違って、緑は死に対して明るい態度で対処している。母親が死んだ時、父親に「俺は今とても悔しい。俺はお母さんを亡くすよりはお前たち二人を死なせたほうがずっとよかった」(『ノ』上、p.133)と言われたが、それでもマイペースでやりたいことをやったり言いたいことをてきぱき言ったりしていた。直子が死んで玲子が旭川に行った後、ワタナベに残されたのはこの緑である。旅行の時も玲子を旭川に送った後もワタナベが電話した相手は緑だった。その生き生きしている緑からワタナベは力をもらえるし、頼りにしていたのだろう。

ハツミは特に美しい女ではないが、人の心を強く揺さぶるものがあった。人の心の共震を呼ぶものがある。それは十二、三年経っても、ワタナベの心に残っている、少年期の憧れのようなものである。このような、ワタナベにとって特別な女性も恋人の永沢と離れた二年後に他の男と結婚し、その二年後に手首を切った。

生きている人と死者の距離はどんどん遠く離れていく。月日が経っても永遠にキズキは17のまま、直子は21のままである。

上述したように、直子とハツミは死的志向が強く、緑は生的志向が強く見られる。そしてワタナベは死に面した時、そこから逃げて新しい生活を求めようとするが、心理的にはなかなかすぐにはできないので緑に助けを求めようとしている。

『ノルウェイの森』におけるスト、性と愛、生と死についての描写は一口で言えば写実主義によってありのままを描いたものだと言えよう。まさに村上自身が言ったように、徹底したリアリズムの文



体で、セックスと死について、「反気恥かしさ」を正面に押し出す気持ちで徹底的に言及する小説である。

## 5. 記号間翻訳の観点からみた映画『ノルウェイの森』

本節では『ノルウェイの森』における小説と映画の相違について記号間翻訳の観点から考察する。

(表 3) 映画『ノルウェイの森』のあらすじ

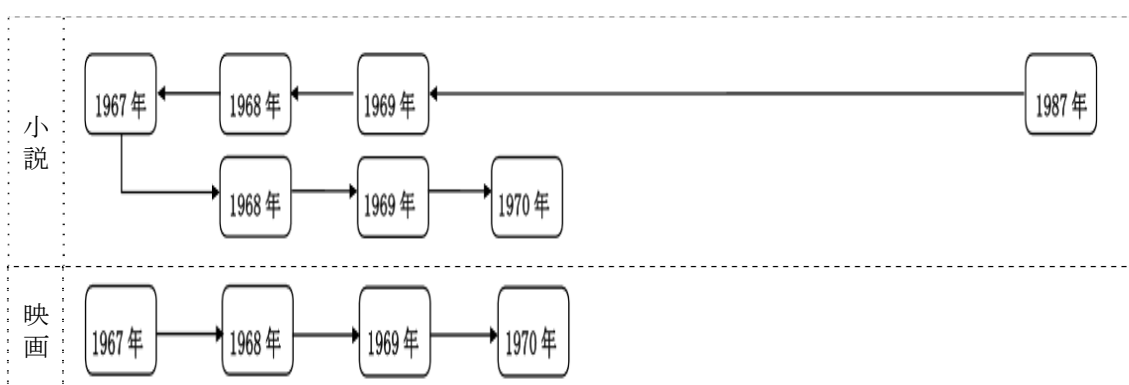
時間	ワタナベの年齢	映画『ノルウェイの森』のあらすじ
1967	17 歳	高校生三人が一緒に遊んでいる。
		ワタナベの仲のいい友人のキズキは自殺した。
		高校の教室の机の上の花。
1968	18 歳	ストのキャンパスを歩いているワタナベ。
		ワタナベと永沢の交際。
		ワタナベは蓮の池の畔で直子と再会。 ワタナベと直子の東京での散策、食事。
1969	19 歳	直子の 20 歳の誕生日の夜、二人は寝た。
		直子は行方不明になった。
		ワタナベのアルバイト。
		ワタナベと永沢とハツミはコンサートへ。
		突撃隊が置手紙を残して退寮。
		ワタナベは直子からの手紙をもらった。
		ハイキングに出たワタナベ。
		ワタナベは緑と交際。
		ワタナベは緑の家に行った。
		ワタナベは京都の阿美寮に行った。
		ワタナベは直子と草原を歩いた。
		レイコはギターを弾きながら「ノルウェイの森」を歌った。
		緑の父親のお見舞い。
		ワタナベは、父親が死んだ、と緑から電話をもらった。
		ワタナベはアルバイト中、怪我をした。
		ワタナベとの食事中、ハツミは永沢と喧嘩した。
		ワタナベは緑とデート。緑はボーイフレンドと別れたと言った。 怒った緑は行ってしまった。
ワタナベが電話しても緑は出てくれなかった。		
1970	20 歳	11 月、ワタナベは 20 歳の誕生日祝いに、直子とレイコからマフラーをもらった。
		冬に、ワタナベは阿美寮を訪れた。
		ワタナベと緑との喧嘩の続き。雪の中の和解。
1970	20 歳	直子は自殺した。
		ワタナベは旅に出た。
		レイコはワタナベを訪ねた。
		ワタナベはレイコと寝た。
		レイコは旭川に行った。
		ワタナベは寮の公衆電話から緑に電話を掛けている。
		ナレーション：季節が巡ってくるごとに僕と死者たちとの距離はどんどん離れていく。キズキは十七のままだし、直子は二十一のままなのだ。永遠に。
		ザ・ビートルズの歌「ノルウェイの森」。
		おわり。

『ノルウェイの森』における小説と映画の相違はいろいろある。

例えば、玲子の療養所入りに関する同性愛の描写、永沢の伝説のナメクジ飲み、緑の家の物干し場での火事見物、病室の緑の父親のキュウリなどは映画では描かれていない。ワタナベが直子からもらった20歳のプレゼント（セーターかマフラーか）、ワタナベと緑の和解の天気（雨の中<sup>11</sup>か雪の中か）なども小説と映画とで描写が違っている。映画の時間制限のことによる結果だろうが、原著の小説への忠実度から考えてみれば、映画『ノルウェイの森』は小説『ノルウェイの森』とだいぶ離れているところが少なくない。そのほかに、以下述べるように、時間的配列、冒頭の場面、東京での再開と直子の行方不明、学生運動、突撃隊と螢、吉祥寺の部屋、女性の服装、終わりのシーン、「ノルウェイの森」にも異なった取り扱い方が見られる。

### 5.1 時間的配列

映画『ノルウェイの森』はベトナム生まれのフランス籍監督トラン・アン・ユン（陳英雄）と台湾籍撮影家李屏賓によって2010年に制作されたものである。記号間翻訳の観点から見てみるよ、映画『ノルウェイの森』と小説『ノルウェイの森』とで次のようなところが違っている。



(図3) 『ノルウェイの森』の時間的配列

まず、時間的配列において、小説の場合では主人公が37歳（1987

<sup>11</sup> 『ノルウェイの森』は『雨の中の庭』というタイトルで書き始めたという説もあるし、新海誠の動画『言の葉の庭』は『ノルウェイの森』に影響されたという説もある。それが本当ならば、『ノルウェイの森』における「雨」は代えられない要素のはずである。

年)の時点から始まって、その18年前(1969年)の草原のことへ、それから20年前の大学一年のことへと回想して行った。その後、時間順に1967年から、1968年、1969年、1970年へと述べられている。それに対して、映画では高校時代の1967年から始まって、それから時間順に1970年まで述べられている。

## 5.2 冒頭の場面

映画『ノルウェイの森』はスクリーンに1967年という文字が出て、三人の高校生がふざけて遊んでいる場面から始まった。そしてビリヤード屋から車の中で自殺しようとするキズキのことが映されている。それに対して、小説『ノルウェイの森』は37歳の主人公のワタナベが11月の雨の日、ハンブルク空港に着陸しようとしている飛行機の中でオーケストラが演奏するビートルズの「ノルウェイの森」を聴いて混乱した場面から始まった。直子が自分に「私のことをいつまでも忘れないで。私が存在していたことを覚えていて」と訴えかけたことを考えるとワタナベはたまらなく哀しかった。「何故なら直子が僕のことを愛してさえいなかったからだ」、という第一章の終わりの言葉が読者の胸を刺したと思われる。

## 5.3 東京での再開と直子の行方不明

小説ではワタナベは1968年5月の梅雨の時期に、東京の中央線の電車の中で直子と再会した。そして一緒に東京の街を歩いたり食事をしたりするようになった。1969年の4月半ば、直子の誕生日の夜に二人が寝たあと、直子が行方不明になった。その後、スト、ワタナベのアルバイト、直子の療養所入所、夏休み、突撃隊の退寮、ワタナベと緑との交際、授業中討論時間を要求する学生、よいう順番による展開である。一方、映画ではストが行われているキャンパスを歩いているワタナベの姿、授業中討論時間を要求する学生、ワタナベのアルバイト、直子と蓮池の畔での再会、東京の街を歩いたり食事をしたりすること、直子の誕生日の夜に二人が寝たあと直子が行方不明になったこと、というような順番の展開だった。まとめると次のような違いが考察される。

(表 4) ワタナベと直子の再会/直子の行方不明

小説	電車の中での再会	東京の散策、食事	直子の誕生日	直子の行方不明	ストのこと	ワタナベのアルバイト	直子の療養所入所	夏休み	突撃隊の退寮	緑との交際	授業を邪魔した学生
映画	ストの中を歩いているワタナベ	授業を邪魔した学生	ワタナベのアルバイト	蓮池の畔での再会	東京の散策、食事	直子の誕生日	直子の行方不明				

#### 5.4 学生運動

小説では、1969年の4月に直子が誕生日の後行方不明になって、5月の末に学生運動が進んで大学がストに入った。夏休みの間、ストが解除し、9月に大学の講義が再開した。授業中、ヘルメットをかぶった二人の学生が教室に入って教授に授業の後半を討論に当てたいと要求した。しかし、映画ではキズキが自殺した場面からいきなりワタナベがストが行われているキャンパスを歩いている場面に移った。そしてある日、三人の学生が授業中、教室に入って教授に授業の後半を討論に当てたいと要求した。それから、ワタナベのアルバイト、ワタナベと直子の蓮池の畔での再会、東京の散策と食事、直子の誕生日、直子の行方不明、というような順番による展開である。学生運動の取り扱い方は小説と映画とで時間的な相違がはっきりしている。

#### 5.5 突撃隊と螢

小説では、東京の学生寮に入ったワタナベにとって同室の突撃隊がとても重要な存在だった。地図描き志向、ラジオ体操好き、清潔好きの突撃隊は大学新生のワタナベにいろいろな刺激を与えて、直子との雑談の話題も提供してくれた。特に突撃隊がワタナベに「螢」をくれたことは、『ノルウェイの森』とその原型の「螢」との繋がりにある。しかし、映画においては突撃隊の影が薄いし、「螢」のことは全然触れられていない。突撃隊におけるラジオ体操、はっきりした大学での目標、ホテルが客引きのために庭に「螢」を放した環

境汚染の問題<sup>12</sup>などは映画では無視されたので、小説に対する忠実度から見れば、映画『ノルウェイの森』はひどい取り扱い方をしたと思われる。

## 5.6 吉祥寺の部屋

小説においてはワタナベが直子と一緒に暮らそうと思って借りたのは吉祥寺の郊外の一軒家だった。大きな地所の一角の離れか庭番小屋のようなもので、母屋との間に広がった庭があり、庭に面して縁側がある家だった。だが、映画では階上にある部屋で、療養に相応しいところとは思わなかった<sup>13</sup>。

## 5.7 女性の服装

まずはワタナベと東京で再会した時の直子は「淡いグレーのトレーナー・シャツ」(『ノ』上、p. 35)を着ていたが、映画では白いシャツに黄色いカーディガンの姿になっている。次はワタナベが初めて阿美寮で会った玲子は「白いTシャツの上にブルーのワークシャツを着て、クリーム色のたっぷりした綿のズボンにテニス・シューズをはいていた」(『ノ』上 p. 173)が、映画ではスカート姿だった。そして、東京のワタナベを訪ねた時の玲子は「男もののツイードのジャケットに白いズボンをはいて赤い運動靴をはき、髪はあいかわらず短くてところどころとびあがり、右手に茶色い革の旅行鞆を持ち、左手に黒いギター・ケースを下げていた」(『ノ』下、pp. 232-233)が、映画ではスプリンコートとスカートの恰好だった。緑が初めてワタナベに話しかけた時は白いコットンのミニのワンピースを着ていた(『ノ』上、p. 35)が、映画では赤いミニのワンピースになっている。

このように服装においても映画は小説と違った色彩の視覚効果を出している。

---

<sup>12</sup> 「螢」と環境汚染の問題については頼(2015)を参照されたい。

<sup>13</sup> 内田(2010)でも同じような指摘があったが、国分寺とあったのは誤植だと思う。

## 5.8 終わりのシーン

小説ではワタナベが上野駅で玲子を旭川に送った後、電話ボックスから緑に電話した。「今どこにいるの？」と聞かれても、自分はどこにいるのか、分からなかったなので、そのどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけた、というところで終わった。

一方、映画ではワタナベが玲子を送った後、アパートの階下の公衆電話から緑に電話した。緑に「今どこにいるの」と聞かれて「僕は今、どこにいるの」と呟いた。それから、「季節が巡ってくるごとに僕と死者たちの距離はどんどん離れていく。キズキは十七のままだし、直子は二十一のままだ。永遠に。」のナレーションの後、ザ・ビートルズの「ノルウェイの森」の歌が流れているところで、終わった。

## 5.9 「ノルウェイの森」

冒頭の飛行機の中のBGMとして流されたザ・ビートルズの「ノルウェイの森」、京都の「阿美寮」で直子のリクエストによってレイコがギターで弾いた「ノルウェイの森」、直子が聞くとすごく哀しくなる「ノルウェイの森」、玲子がワタナベと二人で直子の淋しくないお葬式を行う時にギターで二回弾いた「ノルウェイの森」など、小説では「ノルウェイの森」は曲として登場している。それに対して映画に出たのは「阿美寮」で玲子がギターを弾きながら歌った「ノルウェイの森」と終わりのザ・ビートルズが歌った「ノルウェイの森」で、ギターよりも歌の声がメインになっている感じである。また、小説では冒頭のオーケストラの曲、映画では終わりのザ・ビートルズの歌声のように、映画のイメージは小説のイメージとかなり違っている。

## 6. おわりに—日本語教育教材としての留意点

現代の日本語教育では文字教材だけでなく、音声、映像を利用する教授法も考えられる。『ノルウェイの森』のような小説と映画の両方があるものを教材として利用すると長短それぞれあるように思わ

れる。まず、上下二冊ある小説を完読するのは日本語学習者にとって大変な作業であるし、ある程度日本語力がないとできない仕事である。しかし文字による表現なので語彙量、文型量の増加においては日本語学習のプラスになるのは確かである。

一方、映画の場合、113分という時間で『ノルウェイの森』の物語を理解できる点から見ればとても経済的だと言えよう。それに日本語の音声にも接することができるし、映像や音声で物語の時代背景にある物事を目と耳で確認できるので、視覚的にも聴覚的にも印象に残り、異文化理解に有利である。

但し、記号間翻訳の観点から見れば、映画の取り扱い方と小説の内容と一致していないところが多々ある。映画で見たことと小説の内容との食い違いに気を付けて比較しないと、完全な文学鑑賞にはならないと思われる。

ちなみに、台湾の歌手伍佰は小説『ノルウェイの森』を読んで1996年に中国語の歌「挪威的森林」を作って大ヒットになったが、これは「日本語の小説→中国語の小説→中国語の歌」というように「言語間翻訳→記号間翻訳」という複数翻訳のプロセスを経た作品例である。台湾の日本語教育現場では、小説、映画、歌を同時に紹介すれば学習者の興味が引き起こされ、異文化理解の深化に繋がると思われる。

## テキスト

村上春樹 (1989) 『ノルウェイの森』(上)(下)、講談社

トラン・アン・ユン(陳英雄) (2011) 映画『ノルウェイの森』(DVD)

ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

## 参考文献

内田樹 (2010) 「映画「ノルウェイの森」を見ました」

[http://blog.tatsuru.com/2010/10/28\\_1451.php](http://blog.tatsuru.com/2010/10/28_1451.php) (20160213 閲覧)

何春蕤 (1997) 「性革命——一個馬克思主義觀點的美國百年性史」『性別研究 的新視野』元尊文化

- 門倉正美 (2011) 「コミュニケーションをく見る」一言語教育における  
ビューイングと視読解」『早稲田日本語教育学』9号、早稲田大  
学
- 国際交流基金 (2010) 『J F 日本語教育スタンダード2010』第三版  
[http://jfstandard.jp/pdf/jfs2010\\_all\\_3e.pdf](http://jfstandard.jp/pdf/jfs2010_all_3e.pdf)
- 澤田文男 (2014) 「村上春樹の小説『ノルウェイの森』の文学性」『研  
究紀要』60・61、高松大学
- ダルミ・カタリン (2017) 「村上春樹文学における「魅惑」(charm)  
—ハンガリーにおける村上春樹受容について」『2017年度第6  
回村上春樹国際シンポジウム予稿集』淡江大学村上春樹研究中  
心
- 范淑文 (2015) 「村上文学における都市空間の両義性—『ノルウェイ  
の森』を例として」『2015年度第4回村上春樹国際シンポジウ  
ム予稿集』淡江大学村上春樹研究中心
- 溝口めぐみ (2011) 「『ノルウェイの森』映画と原作をめぐる冒険」  
兵庫県立図書館  
[https://www.library.pref.hyogo.lg.jp/event/event2010/  
22rikatsuyo09\\_siryō.pdf](https://www.library.pref.hyogo.lg.jp/event/event2010/22rikatsuyo09_siryō.pdf)
- 頼錦雀 (2015) 言語学習のメディアウムとしての村上春樹の可能性—  
「螢」の語彙を中心に」森正人監修『村上春樹-20世紀篇』227-258  
頁、淡江大学、台北
- 林立萍 (2015) 「台湾で出版された村上春樹の中訳作品に見られた人  
名の表記」『2015年度第4回村上春樹国際シンポジウム予稿集』  
淡江大学村上春樹研究中心
- 山根由美恵 (2007) 「蛍に見る三角関係—村上春樹の対漱石意識」『国  
文学攷』195号、広島大学国語国文学会
- 米村みゆき (2016) 「小ミューという秩序—『ノルウェイの森』にお  
けるドアーズ、そして『1Q84』へ」『2016年度第5回村上春樹  
国際シンポジウム予稿集』淡江大学村上春樹研究中心
- Jakobson, R. (1959 “On linguistic aspects of translation” .



In L. Venuti (Ed.)

苗栗僑樂國小ホームページ <http://www.chiaolo.mlc.edu.tw>

(2014年6月10日閲覧)

**後記**：本稿は2016年9月29日～10月3日に北九州で行われた、渥美財団主催第三回アジア未来会議で発表した内容に加筆・修正したものである。